1 展覧会のタイトル

石村　実　展　　－ 触覚性絵画 ―

2 展覧会の概要

ミクストメディアによる絵画作品 15 点程度を展示

3 作家のプロフィール

1960　愛知県名古屋市に生まれ、その後、東京都板橋区～練馬区に育つ

1985　愛知県立芸術大学大学院絵画研究科修了

個展

1984　ギャラリー・ラブ・コレクション／名古屋　　駒井画廊／東京

1987　真木（※92～真木・田村）画廊／東京（以降、89、90、92、93、94、95、96、99）

1997　ルナミ画廊／東京（以降、98）

2002　ギャラリー檜／東京（以降、03、04、17、19、20、21、22）

グループ展等（選）

1983　愛知県立芸術大学卒業制作展　愛知県立美術館（作品買い上げ）

上野の森絵画大賞展　上野の森美術館（佳作賞　作品買い上げ）

1984　「空間・遊」名古屋市博物館（以降、85　N-1 ギャラリー・ウェスト）

1991　「平らな深み、緩やかな時間」　真木画廊／東京

1992　「眼の座標」代々木アートギャラリー（以降、93、96、00、02、03）

1995　「未来の予感 -韓国現代美術交流展」韓国 清州

現代アーチストセンター展　東京都美術館（以降、00、02、13）

2005　「東－南、投影と変質」　ギャラリー檜／東京

2015　小田原ビエンナーレ展　飛鳥画廊／小田原

2016　dialogue（with 稲　憲一郎）　ギャラリー檜／東京

2018　dialogue（with 5 人の作家）　ギャラリー檜／東京

2021　小田原ビエンナーレ展　ツノダ画廊／小田原

評論、講演等（選）

1995　評論「絵画表現における重層性について」／第 11 回名古屋文化振興賞（作品集所収）

1999　評論「終わりなき『意識のさわり』の営み」

／かわさき IBM 市民文化ギャラリー『飯室哲也・宮下圭介』展（カタログ所収）

2000　評論「稲憲一郎論」／『月刊ギャラリー』公募評論入賞（『美術評論 2001』所収）

2001　評論「倉重光則論」／『月刊ギャラリー』公募評論入賞（『美術評論 2002』所収）

2009　評論「藤井博論」／第 14 回芸術評論佳作賞（美術出版社　美術手帖 10 月号掲載）

2011　講演「絵画における『時間』について」愛知県立芸術大学（非常勤講師）

2012　blog「平らな深み、緩やかな時間」http://blog.ap.teacup.com/tairanahukami/（継続）
2014　評論「透視する眼差し」／沼津市庄司美術館『宮下圭介』展（宮下圭介作品集所収）
　　講演「絵画特論Ⅱ」沖縄県立芸術大学（非常勤講師）

4　作家のコメント

絵画における「触覚性」ということをこの数年、考えてきました。そうすると、さまざまな興味深い知見に出会います。例えば、伊藤亜紗の『手の倫理』という本には、英語の「touch」にあたる言葉として、日本語では「さわる」と「ふれる」というニュアンスの異なるふたつの表現があり、その違いは次のようなものだと書かれていました。

「ふれる」は人間的なかかわり、「さわる」は物的なかかわり、ということになるでしょう。そこにいのちをいつくしむような人間的なかかわりがある場合は「ふれる」であり、おのずと「ふれ合い」に通じていきます。逆に、物としての特徴や性質を確認したり、味わったりするときには、そこには相互性は生まれず、ただの「さわる」にとどまります。

私が絵画における「触覚性」というとき、「ふれる」と「さわる」の両方の意味を含んでいるように思います。私たちは眼で絵に「ふれる」と同時に、「さわる」のです。絵画を人の創作物としていつくしむと同時に、物として眼で味わうことで、視覚や触覚といった複数の感覚が相互に連動して、主観と客観を越えた表現が実現できると考えているのです。

5　画像